黒田氏の貝類化石編は命名の嚴密なるに於て其比を見ず、氏にして始めて出來た事業である。其記載は主に命名規約に關する事項であるから專門的であつて一般讀者には難解であるかも知れないが我々には眞に貴重なる文獻となるものである。ただ惜むらくは各產地がどの地層に屬するかが明かにされてない事である。

今野氏の植物化石編は初學者にも解る樣に懇切に說き出し氏の淸博なる學問上の見解を縱橫に驅使したもので正しく本書中最良き部分である。地方的地質に全く興味なき學徒はないかもしれないがあつても今野氏の植物化石に關する一編を見逃す事が出來ないから此部分の爲にだけでも本書を求めるの要はある。

本間氏は本文を擔當するが初學者の便を慮り地質學一般に涉り著者獨特の解說法を以て筆を起してゐる。また岩石の研究は比較上無味のものであるが同樣に原則から說いてあるから專門家ならずとも樂に讀める。本間君は自分から言明して岩石の研究は未だ完成しないとしてゐる。しかし本書の性質としては可なり充分のものと言はねばならぬ。

本間君は地質現象に生理現象を比喩してゐるが此は特にフオツサマグナの研究に於て面白い思ひ附きである。此重要なるフオツサマグナの研究はなほ一層奥に突き進まねばならず多くの子を產む事が在信州の同學の士の勉であらう。（槇山）

○信濃中部地質圖　本間不二男、小山進調査　信濃教育會小縣上田部會發行　定價六圓　古今書院發賣

十二萬分ノ一、別に斷面圖一葉を附す。信濃中部地質誌と併せ讀むべきもので切り離して發賣したのは使用者の便宜の爲であらう。鮮明なる印刷を推奬する。

雜報

○米國の自動車　過去二十數年間に自動車が出現して米國國民生活に大なる影響を與へた。田舍と都會とを問はず外出には交通機關として用ひられ、郊外又は公園に出でゝ觀劇遊戲運動等と相並んで重要な娛樂機關となり道路の改良と共に長距離交通機關として汽船鐵道の位置を奪はんとし、現に一九二八年米國人のカナダ旅行者の使用した自動車數は三百六十五萬臺に達した、さうして鐵道及汽船によるものは多少減じてゆく、さうして自動車が增加したゝめに、米國は英大なゴムの消費國となり、その消費四十四萬噸中八割五分はタイヤ其他の材料となり、生產中のギヤソリンの八割も亦之に費やされ、鐵は生產の一割八分、硝子板は七割四分、アルミニユームは二割七分、銅の一割五分を用ひ、裝飾用柔皮は六割硬木は一割九分、錫は二割六分いづれも自動車の製造に用ひられる、かくて直接間接に自動車に關係する米人四百三十四萬人と稱し殆ど米國の經濟的革命を來した、その生產は國內需用を充たすのみでなく外國へ進出し一九二八年の輸出五

億弗をこえ世界の自動車の七割七分は米國製である、今世界の總數三千百七十七萬臺の中

米　國	二四、四九〇、〇〇〇	臺	人口割五人に一
イングランド	一、一二〇、〇〇〇		三十二人に一
フランス	一、〇九〇、〇〇〇		三十七人に一
カナダ	一、〇六〇、〇〇〇		九人に一
ドイツ	五三〇、〇〇〇		百十八人に一
オーストラリヤ	五一〇、〇〇〇		十二人に一
アルゼンチン	三一〇、〇〇〇		?
イタリー	一八〇、〇〇〇		二三〇人に一
ニュージーランド	一五〇、〇〇〇		九人に一
スペイン	一五〇、〇〇〇		一五一人に一
スウェーデン	三〇、〇〇〇		四七人に一
南アフリカ	一三〇、〇〇〇		六一人に一
ボリビヤ	一一〇、〇〇〇		七〇人に一
日　本	七四、〇〇〇		八五〇人に一

この表はいかにも面白い事實を語るもので人口稀薄な廣漠な國程自動車が多い、恐らく將來に支那の自動車は增加するであらう、さうして米國についで其の需用があると思はれる、ことに支那のごとく鐵道や河川航路の發達しない國に於ては猶更である、この際支那で自動車工業を起す必要があると思はれる、米國で自動車の王はフォードであつて一九二三年には米國の生産の四百八萬の中二百九萬餘をつくつた、近頃は開放自動車がおとろへて、箱自動車が流行してゐる、一九二八年には八百七十六弗平均のものがよくうれた、其生産數四百三十五萬臺に達し世界の八割八分を占め、フランスや英國は約二十一萬臺しかつくらなかつた、ドイツは九萬、イタリーは五萬五千、致須國でさへ一萬三千をつくつた、日本も早く立派なものをつくるやうにしなければなるまい。

○米國ニューイングランド地方の工業　新英蘭即

マサチユセツツ、メーン、ニューハンプシヤ、バモント、コネチカツト及ロードアインランドの六州は米國で最も早く開けた所で工場も夙に進歩した故に現在でも猶金屬、繊維、皮革等の工業について米國の主要地方であるが、南北戰爭までは米國で第一位であつたけれども近頃では他の地方の開發につれて、この地方はそれ程でない、或は漸く衰へるといふ人もある位にかはつた。

ニューイングランドの工業といへば從來一般に繊維工業、及靴製造業を想起したけれども國務省の一九二五年度の調査は左の如くである。

原料種類	原料價格千弗	製品價格千弗
金屬工業	六七六、三五六(二一%)	一、六二三、二二六(二六%)
繊維工業	一、二二二、四八八(三七%)	二、六二三、二二六(三二%)
皮革及ゴム業	四〇六、七八八(一二%六)	七五二、一六一(一二%二)
製紙印刷	二五四、四二六(八%二)	五四四、三九九(九%)

食糧品	二九、七三〇（九％）	四三、二八七（七％）
化學製品	一五三、〇八二（四％七）	二七七、四〇七（四％八）
其他	三二、九六六（六％九）	四九六、七三六（八％一）
合計	三、三四、八五六	六、一六一、〇〇九

この統計によると工業中金屬工業は優位にある、織維工業と皮革ゴム工業の三者で全收益の七一％に達する、工場も金屬工業に屬するもの三、六六二で第一位であり織維工業は二五七九である。

之を米國全體の工業に比較すると一九二七年にニューイングランド地方は全國の約一〇％九七に達し年額八百萬弗以上の收益を上ぐるもの五十九種の中四十二種を算し依然として米國に於ての工業中心たるの概がある、蓋しこの地方は歴史が古いから其種類が他の地方に比して多樣である、その製造にも熟練を要するものが多く時計や寶石等の製造は他の新進工業地では出來ない。まづさうしたことを考へると、この工業の歴史といふことは重要な役目をもつものといへるであらう

○人絹と羊毛

近年人絹の擡頭により羊毛製品の消費縮少の傾あり、しかも人絹の需要益々旺盛であるから、將來羊毛の地位にどんな影響を及ぼすであらうかと考へてみるに、いかにも婦人服や室内設備の改善は人絹の需要を盛んにするであらうけれども、羊毛は之に對して左の强味がある。第一羊毛の需給の關係をみるに目下の羊毛供給國は濠洲、アルゼンチン、南阿、南ロデシヤ、ペルー、ロシヤ、東アフリカ及南印度である、是等供給國は其生産高が殆ど最高に達し今後十年間に更に大に增加しない、世界最大の羊毛國たる濠洲と雖も、現在以上は出せない、何となれば人口增加のために飼羊業者は集約的になつてゐて、生産費が高くなるのみでなく小麥や玉蜀黍の耕地が增加するために、羊飼は段々劣等地に退却する勢であるから一九一三年以後人口增加と羊毛增産との割合をみてもわかるやうに、人口の方が一歩さきにすゝんでゆく。

他方に於て人口の增加に伴ひ羊毛の需要は漸增し、殊に東洋諸國の此傾向は著しく、日本では一九二七年に人口八千四百萬を示し、羊毛の輸入高前年度八千百四十萬磅から、一躍して一億五百萬磅に激增した、又同年の毛織物及毛糸の輸入も增加した。

	一九二六年	一九二七年
毛絲	一二、三	一八、三
毛織物	一三、七	一六、五

中華民國及英領印度に於ける需要も漸增の傾向で歐洲式服裝の流行で羊毛の需要は增進する、又人絹と羊毛との交織物は今後益々實行增加すると共に、洋服及下着として占むる羊毛の位置は到底人絹の侵蝕する能はざる所である、羊毛は其柔軟性、持續性、伸縮性、溫暖なる點に於て人絹にまさる、一方人絹の生産と消費は羊毛に比すれば極めて少量である。今日のところ羊毛業者は心配しなくてもよからうといふのが南阿のサーフォンタインの意見である。